「エツクハルトの聖餐論とベギン」

中　川　憲　次

はじめに

ベギン会修道女たちの霊的生命の源泉であったに違いない「頻繁なる聖体拝領」について、マイスター・エツクハルトはどのようなメッセージをその説教で語っていたのであろうか。

ここでは、エックハルトの若き日の力作であり、その最初のドイツ語著作でもある、『教導講話(Reden der Unterweisung)』の20章にみられるエックハルトの聖餐論を踏まえた上で、聖体拝領についてこそ触れているとわれわれには思われる説教第20番（ａ、ｂ）を検討したい。そのさい、まず聖体拝領という言葉の初期キリスト教の歴史をたどり、さらに中世後期の「頻繁なる聖体拝領」に焦点を当てて、エックハルトの説教とベギンの女性の出会う状況を明らかにしてから、本論に入りたい。

1　「聖体拝領＝聖餐」に関する聖書と使徒後教父の証言

聖体拝領の原型となったのは、新約聖書のいわゆる「主の晩餐」の記事である。すなわち、マタイによる福音書26章26節から28節（マルコによる福音書14章22－25節、ルカによる福音書22章19－20節並行）に次のようにある。「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。『皆、この杯から飲みなさい。これは、罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である』」。この記事の他に使徒言行録の２章42節には、「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」（註１）とある。「主の晩餐」は「パンを裂くこと」として受け継がれていたことがわかる。そしてコリントの信徒への手紙一10章16節には「わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか」とあり、ぶどう酒をキリストの血として飲むことも受け継がれていたことは明らかである。さらに使徒後教父の証言としては、遅くとも２世紀初頭に書かれたと考えられる『十二使徒の教訓（ディダケー）』の９章、10章がある。ここでは９章を引用しておく。「聖餐については、次のように感謝しなさい。最初に杯について。『わたしたちの父よ。あなたがあなたの僕イエスを通してわたしたちに明らかにされた、あなたの僕ダビデの聖なるぶどうの木について、あなたに感謝します。あなたに栄光が永遠に〔ありますように〕』。パンについて。『わたしたちの父よ。あなたがあなたの僕イエスを通してわたしたちに明らかにされた生命と知識とについて、あなたに感謝します。あなたに栄光が永遠に〔ありますように〕。このパンが山々の上にまき散らされていたのが集められて一つとなるように、あなたの教会が地の果てからあなたの御国へと集められますように。栄光と力とはイエス・キリストによって永遠にあなたのものだからです』。主の名をもって洗礼を授けられた人たち以外は、誰もあなたがたの聖餐から食べたり飲んだりしてはならない。主がこの点についても、『聖なるものを犬に与えるな』と述べておられるからである（マタイによる福音書７章６節）」（註２）。

ここまででは、まだ、本稿におけるわれわれの論点と関係のある「食餌的聖餐論」は如実には出てきていない。それは、２世紀の司教エイレナイオスが180年から199年の間に書いたとされる『異端反駁（Adversus haereses）』の第５巻２章２節から３節にかけて出てくる。曰く、「＜２節＞　しかし、神のなさる全ての事を軽蔑して、神による肉の救済を承認せず、神が肉を朽ちることなきようにすることができないと主張して、軽蔑し、その再生を認めようとしない彼らは、あらゆる点で愚かな人々である。しかし、これが本当に救済を達成しないなら、主は神の血で我々を贖わなかったし、エウカリスティアの杯は、主の御血の拝領でないことになる。またパンの拝領は主の御体の拝領でないことになる。血は、静脈と肉から生じ来るものであり、主の弟子が『私たちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました(エフェソの信徒への手紙１章７節)』と宣言しているように、真に実体となった神の言葉は、主ご自身の血によって我々を贖ったのである。また、私たちは、その肢体であるとともに、さらに被造物によって育てられるものであり、また主が私たちに被造物を与え、太陽をのぼらせ、雨を降らせる。主は、被造物の一部である杯をご自身の血であると認識し、それによって私たちの血を養う。また、被造物の一部であるパンをご自身の体であると確信し、それによって私たちの身体を養う。＜３節＞　したがって、混ぜられた杯と作られたパンが神の言葉を受け取り、エウカリスティアとなり、私たちの肉の実体を増し加えるキリストの身体となる」（註３）。ここに、「食餌的聖餐論」が明白である。この最後の「私たちの肉の

実体を増し加えるキリストの身体となる」という言葉こそ、以下に扱うベギンの聖体拝領の本質を言い表しているとわれわれは考える。

2 「頻繁なる聖体拝領」をめぐる状況

中世後期において一般信徒は、聖体拝領を受けなくなっていた。それは、インノケンティウス三世の絶頂期の1215年に招集された第4回ラテラノ教会会議において、以下のような決定が為されたことからも裏付けられる。その第21章「告白の義務、司祭の秘密厳守の義務、復活祭の聖体拝領の義務」において次のように言われる。「性別をとわず分別の年齢に達したすべての信者は、少なくとも年に1回所轄司祭にそのすべての罪を告白し、命ぜられた罪の償いをできるかぎり果すよう努め、少なくとも復活祭の頃謹んで聖体を拝領すること。ただし何か正当な理由のため聖体拝領をしないように所轄司祭から勧められてしいる者を除く。そうでなければ生涯教会への出入りを禁じられ、死後もキリスト教的葬儀を拒否されるであろう。無知を理由に自己弁解をする者がないように、この規律を教会で繰返して発表しなければならない. 正当な理由のため所轄司祭以外の司祭に告解することを望む者は、まず所轄司祭の許可を求めなければならない。そうしないと他の司祭は罪を赦すこと、または赦しを拒むことはできない（註4）」。この引用のうち、「少なくとも復活祭の頃謹んで聖体を拝領すること」という言葉が、当時の一般信徒における聖体拝領の衰退を自ずから物語っている。

しかし、ベギンの女性たちは当時の一般的な傾向とは逆に、頻繁なる聖体拝領を渇望していた。その事実は、「聖体の祝日（corpus christi）」制定のきっかけを作ったのがベギンの発生地であるベルギーのリエージェで活躍した女性だったことからも裏付けられよう。その女性とは、ベギンの研究者たち、すなわち、マクドネル（E.W. Mcdonnell）やバイナム（C.W.Bynum）、そしてルビン（M. Rubin）らによって報告されているように（註5）、コルニヨンのジュリアナ（Juliana of Cornillon＝1193頃—1258）である。ルビンは、ジュリアナの見た幻視についての伝記作家の報告を次のように引用している。「私は、その丸い中のの一部分が欠けている月が彼女に華麗に現れたということをお話します。彼女は、非常に驚いてずっとこれを見ていました。そして、これが何を意味するのか知りませんでした。…中略…その後、キリストは教会が月の中にあるということ、そして月の中の失われた部分は、この世において祝うことをキリスト御自身がその信仰者に望まれるであろう、教会における一つの祝宴のことだと彼女に知らせました」（註6）。こうして、やがて、この「聖体の祝日」は教皇ウルバーヌス4世の1264年8月11日の教書「トランシトゥルス（Transiturus de hoc mundo）」によって、キリストの記念として制定される。この教書は、聖体拝領において表現される信者のキリストへの愛を激賞した後、毎年三位一体主日後の木曜日に「聖体の祝日」を祝うようにも命じている。そして、エックハルトがその晩年に絢爛たる説教活動を展開し、またベギンの女性達の活動も盛んであったケルンに「聖体の祝日」が導入されたのは1306年であり、シュトラスブルクに導入されたのは1317年であった（註7）。これは、頻繁なる聖体拝領を渇望するベギンの女性たちの数の多さが呼び込んだ事態であったと言えよう。

では、エックハルトと同時代の神学者たちは聖体拝領に対して何といっていたのだろうか。ドミニコ会に属する神学者アルベルトゥス・マグヌスは、一般論としては頻繁なる聖体拝領を勧めていながら、女性に対してはこれを禁じた。その理由は、C・W・バイナムの報告によれば、聖体の頻繁なる受領が聖体拝領に対する侮りを招きかねないということであった（註8）。アルベルトゥスが活躍していた1200年代前半、ケルンにはベギン運動が盛んであった。そのベギンの女性達の間には、代表的なベギン修道女の言葉を書き残した書物に見られるとおり、恍惚状況を聖体拝領によって示す者らもいたことであろう。アルベルトゥス・マグヌスの発言は、そのような状況を念頭において理解すべきであろうが、ただアルベルトゥスがベギンの女性たちと対話的に向き合っていたとは考えられない。

アルベルトゥスの弟子で、ドミニコ会に属する神学者トマスは、『神学大全』の第3部、問題80の第10項で、聖体拝領の受け方について論じている。問題設定はまさに「毎日聖体を拝領することは正当であるか」である。この問題設定に対して、例の如くトマスは、まず反対論を示し、それに対して一つ一つ答えていく。そして、結論としてトマスは次のように言う。「Nam in primitive Ecclesia, quando magis vigebat devotio fidei Christianae, statutnm fuit ut quotidie fideles communicarent.（さまざまな規則は、その時代その時代の教会の様子にしたがって発されました。キリスト教徒の信仰の献身がもっと盛んだった初代教会において、忠実な信仰者は毎日聖体を拝領すべきことが制定されました）」。その上でトマスは、歴代の教皇が信徒の信仰の熱の冷めるに応じて聖体拝領の勧めを徐々に緩めてきた例を挙げるのである。トマスは最後に、インノケンティウス三世の言葉を例に挙げている。曰く「Postmodum vero, propter iniquitatis abundantiam refrigescente caritate multorum (Mt.24, 12), statuite Innocentius Ⅲ ut saltem semel in anno, scilicetin Pascha, fideles communicent.-Consulitur tamen in libro De ecclesiasticis dogmat, omnibus diebus Dominicis communicandum（もっと後になって、近くに不当なことが溢れ、多くの人の愛が冷めた（マタイによる福音書24章12節）時、インノケンティウス三世は、少なくとも年に一度、すなわち復活祭の日に信仰者は聖体を拝領すべしと断定した。しかしながら、『教会の教義について』という書物においては、主の日

毎に聖体を拝領すべしと助言した。)」。

トマスの言わんとするところは両義的である。初代教会のような信仰の熱烈さを期待できないトマス当時の教会世界において、年三回の聖体拝領の勧めが適当だ、といいながら、最後には日毎の聖体拝領を勧めるインノケンティウス三世の言葉を引用していたのである。これが、トマスの、その時代との対峙の仕方であった。

上述の二人とは違って、フランシスコ会に属する神学者ボナヴェントゥーラは、1254年から1257年にかけて物した『神学綱要（Breviloquium)』第６部「秘跡の癒しについて」の第９章「聖体秘跡の完全性について」において、聖体拝領をめぐる問題に触れて次のように言っている。「この秘跡は特別な荘厳さをもって祝われるように命ぜられる。時間と同様に場所において、ミサ聖祭における衣服と同様に言葉や祈りにおいて、このことは命ぜられるのである（註９)」。このように、ボナヴェントゥラは、聖体拝領を「時間と場所」の観点から荘厳に扱わねばならないと言い、どちらかと言えば聖体拝領を抑制している。これは、頻繁なる聖体拝領の渇望に対立する言葉であろう。

3　エックハルトの教導講話第20章と説教第20番ａ、ｂにおける聖体拝領（註10）

3．1　『教導講話（Reden der Unterweisung)』20章

まず、表題に続けて、冒頭の部分を引用する。

「【私たちの主の体の頻繁なる拝領について。私たちがその拝領の仕方、およびそれにどのように専念すべきかについて】私たちの主の聖体を拝領したい人は誰でも、自分がその時にどのように感じているか、あるいは、それらの畏敬か専念はどれほど大きいかについて、吟味する必要はなく、もっと正確に言えば、心の意志および心の状態に注意するべきである。あなたは、感情にあまり重きを置かず、むしろ、あなたが何を愛し、何を熱望しているかに重きを置くべきである。主に接近することを望み、それが自由にできる者は誰でも、第一に、あらゆる罪に匹敵することがない良心を持っているべきである。第二に、その者らの意志は、神以外に何も意図せず、また要求することのないように、また神と違うものは不快に感じるほどに、神に向いているべきである。そのために、私たちがどれくらい神から遠くに、あるいは、どれくらい神の近くにいるのかを、自分の心の姿勢のより大きいかより劣った程度に応じて、私たちは正確に調べねばならない。第三に、私たちは、聖体拝領のために、および主のために私たちが持っている愛がさらに強く光り私たちが感じる畏敬がその儀式への頻繁な参与によって縮小されるべきでないことを知るべきです。なぜなら、多くの場合、ある人にとっては生であるものが、別の者にとっては死を意味するような事柄があるからです」。

この引用箇所において、30代半ばのエックハルトは霊的に熱心な聖体拝領の姿勢を聴衆に勧め、さらに頻繁に聖体を拝領することをも勧めている。ただ、その頻繁なる聖体拝領が、その頻繁さのために軽々しいものとならないように、という条件を添えている。

ところで、この講話は、ヨーゼフ・コッホの研究に基づいて川崎幸夫教授が報告するところによると、1294年から1298年の間に、エアフルトのドミニコ会修道院で、その院長としてエックハルトが語ったものである(註11)。エックハルトは30代半ばであり、聴衆は若き修道士であった。川崎教授がヨーゼフ・コッホに依拠しつつ報告しているところによれば、1283年にモンペリエで開催されたドミニコ会総会で若い修道士たちへの典礼教育を徹底するようにとの決定がなされていたという（註12)。この点を考慮すれば、エックハルトがわれわれの引用箇所において熱心かつ頻繁なる聖体拝領を勧めているのも肯ける。

3．2　説教第20番ａ、ｂ

次に、エックハルトの説教活動の円熟期、そして晩年にいたる1317年頃から1326年の間に、シュトラスブルクか、あるいはケルンでなされたと思われる説教20番ａ、ｂを取り上げたい。この説教は少なくとも50代後半を迎えていたエックハルトが物したはずであるが、中心的なメッセージは教導講話第20章のそれとよく響きあっている。

この説教第20番のａとｂは、酷似している。しかしコールハンマー版のテキストに付された分析において、編集者のクヴィントは次のように言う。「この説教はテキストが同じであるのみならず、構想においても、使用された言葉においても重なっている。にもかかわらず、この説教が際立った違いを見せない点が問題なのではなくて、むしろ同様のテキストに基づきながらも独立している、この二つの説教が重要なのである」。われわれは、何よりも同じ主題のエックハルトの説教が二つ、おそらくは女子修道士、もしくはベギンの女性の手によって書き残された事実にこそ、着目したい。この事実は、エックハルトが、とりわけベギンの女性達にとっての聖体拝領の有する意味の重さに、どれほど深く思いを致していたかをうかがわせるのである。われわれは、書き残されたもの以外にも、熱心かつ頻繁なる聖体拝領を奨励する説教が多くなされていたに違いないと想像する。

以下では、この二つの説教の相違点に配慮しつつ、聖体拝領についてのエックハルトのメッセージに焦点を当てて読んでみたい。

この説教は、われわれの着目した聖体拝領をめぐる状況に特に留意せずに読むなら、単なる否定神学のデモンストレーションに過ぎないという受け取り方もできる。事実、たとえば松山康国氏は、1972年に出版された『無底と悪　序説』所収の論文「晩餐の譬話」においてこのエックハルトの説教第20番を取り上げ、「神の無名性」

に着目し、「否定神学のなす神概念の探求の一端」を示した後、「キリストの血肉を食べ物とするとはどういうことか。それは、十字架にかかられたキリストの血と肉を食べ物とするということに他なりません。すなわちイエス・キリストと同じく、自らもキリストの十字架の死の苦しみにならうということが、そこにはあります。ここに言われる晩餐、ないし聖餐の意義の核心はこの点にあるのであって、いわゆる冥想的神秘主義における単なる神人合一とどまるものであってはならない、と思われます（註13)」と言うに留まっている。熱心かつ頻繁なる聖体拝領を渇望しつつ、それを禁じられつつあったベギンの女性たちこそがこの説教の有機的な聴衆であったことに思いを致すなら、この説教の現場が言葉の向こうに立ち現れてくるはずである。この説教は教導講話20章と同じメッセージを語りながら、聴衆がエアフルトの若き修道士たちから、迫害されつつ困難な状況を生きているシュトラスブルクやケルンのベギンの女性たちに変わっていることによって、ただならぬ迫力を持って来ている。この事実に配慮しないなら、平板な解釈に終わってしまわざるを得ないであろう。

この説教をベギンへの励ましとして読むなら、この説教は俄然、現実味をもって立ち上がってくるのである。この説教の端々に、頻繁なる聖体拝領を望んでいたベギンを意識していると思われる言葉が、散見するのである。どのようにか。本文を見てみよう。

まず聖書箇所のルカによる福音者14章16節の「ある人が盛大な晩餐会を催した」という言葉が、まずラテン語で示され、ついでドイツ語に訳される。そのさい、ラテン語 cenam magnam が eine abentspise oder eine abentwirtschaft と訳される。単なる夕食でなく、宴であることを強調しているのであろう。日常的な聖体拝領も「聖体の祝日（Corpus christi)」も、まさに宴であった。

そしてａテキストでは「誰が用意したのだろうか。＜ある人＞である。彼がこれを晩餐といっている意味はなんであろうか」と説教が始まる。ここには、特に聖体拝領への言及はない。しかしｂテキストでは聖書朗読に続いて「朝、宴を催す人はいろいろな人々を招いた。晩賛には大いなる人々。気に入った人々、親しい人々が招かれた」と語られた後、次のように聖体拝領に言及される。「今日、キリスト教では、主がその弟子たち。その親しい友たちに食べ物として御自身の聖体を与えたと主の用意した晩餐の日（tac der abentwirtschaft）を祝うが、これが第一の意味である」。その上で、第二の意味が説かれる。そのさいエックハルトは abentezzen という言葉を使っている。ここでエックハルトは、聖体拝領の儀式的側面を意識するときは abentwirtschaft を、その食餌的側面を意識するときには abentezzen もしくは abentspise をと、言葉を使い分けているようである。この点は、ａテキストにもｂテキストにも共通している。ただａテキストでは abentspise を使いながら、ｂテキストの同じ文脈では wirtschaft を使っていることもあるので、エックハルトはあまり意識せずにその時の成り行きで自由に使い分けているのかもしれない。

その後、エックハルトは大グレゴリウスの説教の言葉を引用しつつ次のように語る。「第四に、この（晩餐の）意味は、聖グレゴリオスが述べたように、この晩餐の後には他のいかなる食事もないことである。神がこの食事を与えるものには、これはたいへん甘く、美味しいから、以後他の食事を食べたい気にはならない」。ａテキストにもｂテキストにも共通するこの言葉は、聖体のパンを食べると、それ以外に何も食べられなくなったといわれていたベギンの女性に共通する状況に呼応している。バイナムの報告によると「イグニーのメアリーは、彼女の聖体拝領の熱望に、および彼女自身をキリストの傷の形において切断することにより病気の後に食べることに関する罪に応答しました。ルーヴェンのイーダが、高かった彼女の生活の中でその時聖痕を受け取った後、食べることに関する罪に応答しました、聖体拝領における熱狂および彼女の家族との矛盾のを両方とも指示する；その後、イグニーのメアリー（この人は食べることの罪から彼女の肉を切断した）は、拡張された断食のプログラムに乗り出しました。彼女は、一日に一度だけ（夕方に、あるいは夜に）食べました。彼女はワインおよび肉を摂らなかった。頻繁に、彼女は、彼女の喉を裂き、それを出血させ、粗い黒いパンだけを食べた。ある時、35日間の節制と沈黙の後に、彼女は彼女自身に戻り、この世の食物を食べようと努めた。彼女はその匂いを嗅ぐことができなかったが、ただ聖杯のワインだけは飲むことができた」（註14）ということである。さらに同じ頁でバイナムは「聖体の祝日」制定のきっかけを作った前述のコルリヨンのジュリアナについいても触れている。曰く、「コルニヨンのジュリアナ（この人は子供時代に過度の断食のゆえに罰せられた）は、青春期に食べることへの彼女の拒否を隠そうと努めました、しかし、彼女は、一体どうやって生きているのか彼女の姉妹が不思議に思うほどにほとんど食べなかった」。

次に重要と思われるのは、アウグスティヌスの『告白録』１章１節及び８章８節と関連する次のような文章である。「主よ、もし、あなたが私たちからあなた自身を取り去るならば、私たちに別なあなたを与えてください、そうでなければ、私たちの安らぎは見つけられないでしょう。あなた以外のものは何も欲しくはありません」。この言葉も、ａ、ｂ両テキストに共通である。この言葉を聖体拝領と結び付けて解釈するなら、すさまじい迫力が出てくる。そして、ベギンの女性にとって聖体のかけがえの無さは、このような言葉をもって対応しても、なお余りあるものであったろう。

続けて語られた言葉も重要である。曰く、「貴い聖遺物はむき出しにされ、触れられ、眺められるのは望まない。それゆえ、神は、私の身体の食べ物が私の魂により

変えられるように、パンのような衣装で身を飾っているので、私の本性のうちにはこれと結び付かない僅かなかけらもまったくない。なぜなら、本性の内部には一つの力があり、それは最も粗悪なものを分離し、外へ投げ出し、最も高貴なものを高く上げるので、どこにもこれと結び付かないところは針の先ほどもない。私が二週間まえに食べたものは私の母の胎内で受けたものと同じように、私の魂と一つになっている。純粋な仕方でこの食べ物を受容したものはこのようなもので、肉と血が私の魂と一つであるように、真に魂と一つになるのである」。これはaテキストであるが、aテキストではこの後に「アウグステイヌスによると、神についていわれることは真ではない、しかし、神について語られないことが真である、という」という文章を含むいわゆる否定神学論が展開され、それを挟む形で、次のような食餌的聖餐論が述べられる。曰く、「聖アウグスティヌスもこの食べ物について深く考えた、が、彼は恐れて、味わわなかった。そのとき、彼は上から、自分のすぐ近くで声を聞いた。『私は大いなる人々の食べ物である。私を食べて、成長し、大きくなりなさい。しかし、私があなたに変わると思ってはならない。むしろ、あなたが私に変えられるであろう』。魂の内部で神が働くとき、魂のうちに存在する神に等しくないものは、炎の熱で精錬され、外に投げ出されてしまう。純粋な真理にかけて、魂はいかなる食べ物が私たちのうちに入るより以上に神のうちに入って行く、それどころか、魂は神に変わるのである。そして、魂のうちには一つの力があり、それが最も粗悪なものを分離し、神と一つに結合するのである。それは魂の閃光である。食べ物が私の身体と結び付くより以上に私の魂は神と一つになるのである」。以上の箇所はbテキストでは中間の否定神学論が無く、食餌的聖餐論に終始している。

次の段落において、この聖なる大晩餐会の主催者である神について、その匿名性についての説き明かしが展開される。aテキストでは「誰がこの晩餐会を用意したのだろうか。ある人である。この人の名前は何というのかあなたは知っているか。この人は匿名である」と簡単に片づけられているが、bテキストでは一段落を全て用いて、プロクロスやディオニシオスの言葉を引用しながら説き明かされる。

しかしわれわれが注目したいのはその次の言葉である。曰く、「この人は僕を送り出した。グレゴリオスはこの僕は説教者を意味するといっている。もう一つの意味は、この僕は天使であり、第三には、私が思うに、この僕は神により創造された魂の閃光であり、上から刻印された光であり、神的でないすべてのものとつねに戦う神的な本性の像である」。引用されたグレゴリウスの説教の言葉は、コールハンマー版に付された註によると以下のとおりである。「しかし、もし説教者団を指していないのなら、父から、招待されている者へと放たれたこの僕によって何が意味されているのか（sed quis per hunc servum qui a patrefamilias ad invitandum mittitur, nisi praedicatorum ordo designatur）」。この文章中の「praedicatorum ordo」という言葉を、エックハルトはaテキストでは「prediger」、bテキストでは「der prediger orden」と訳している。この場合はbテキストが、大グレゴリウスの原典には忠実である。ところで、「praedicatorum ordo」は、やはり説教者団とでも訳すほかないであろう。大グレゴリウスの時代、説教者修道会すなわちドミニコ会はまだ誕生していない。しかしエックハルトが己が属する修道会であるドミニコ会を意識し、今まさに説教している自分自身をこの「僕」と同一視していることは容易に想像できる。ドミニコ会の説教者がこの「僕」であるなら、聖体拝領をベギンの女性に呼びかけ、その儀式を執り行ったのも、エックハルトもその一員であるドミニコ会の説教者である。説教第20番は、ここに来てベギンの女性とエックハルトの日常性を俄然際立たせるのである。

もちろん説教自体が言いたいのは、この「僕」が「説教者団」なのではなく、「天使であり、神により創造された魂の閃光であり、上から刻印された光であり、神的でないすべてのものとつねに戦う神的な本性の像である」ということである。そしてこの「僕」とは「ある力」であり、「絶えず善なるものに向かって志向して」おり、「地獄に落ちていて善を求めるのである」という。この言葉は同じ段落の最後にも次のように繰り返される。曰く、「これ（件の力）には二つの機能がある。一つは、純粋でないものに不屈に反抗することであり、もう一つの働きは、地獄にいるものであっても、――これは魂のうちに直接に刻印されるのであるが――つねに善なるものへと誘うのである。それゆえ、これは盛大な晩餐である（Ez hat zwei werk. Einez ist ein widerbiz wider dem, daz niht luter enist. Daz ander werk ist, daz ez iemerme locket dem guoten-und daz ist ane mittel ingedrucket der selenochdenne den, die in der helle sint. Dar umbe ist ez ein groz abentspise）」。この箇所はbテキストでは、「これは神に常にすがりつくことを意味し、決して悪いものを望まない。地獄にあっても善に向かって志向する。そしてこれは魂のうちで純粋でないもの、神的でないもの一切と戦い、間断なくあの晩餐に招くのである（Daz sprichet als vil als daz alle zit gote zuohanget.Und ez enwil niemer niht ubels. In der helle ist ez geneiget ze guote ; ez krieger iemer in der sele wider allez, daz niht lutter enist noch gotlich und ladet in ane underlaz ze der wirtschaft.）」となっている。ここでわれわれが注目したいのは、二度繰り返された「地獄に（in der helle sint）いる」、という表現である。地獄とはどこか。神の平安のうちに祈りに明け暮れることのできる修道院の中ではあるまい。迫害さえ受けながら、この世の直中での労働にいそしみつつ、困難な日々を生きていたベギンの女性たちの日常の現場こそ、地獄でなくてなんであろう。この「地獄」という言葉こそ、エッ

クハルトがベギンの女性を聴衆の中に強く意識して語った言葉だとわれわれは考えたい。

また同じ箇所においてわれわれは、aテキストの「(この力は) つねに善なるものへと誘うのである。それゆえ、これは盛大な晩餐である (ez iemerme locket dem guoten . Dar umbe ist ez ein groz abentspise)」という言葉、そしてbテキストの「(この力は) 魂のうちで純粋でないもの、神的でないもの一切と戦い、間断なくあの晩餐に招くのである (ez krieger iemer in der sele wider allez, daz niht lutter enist noch gotlich und ladet in ane underlaz ze der wirtschaft.)」という文章にも注目したい。この「常 (iemerme)」なる、そして「間断なき ane underlaz」聖体拝領 (abentspise =aテキスト、wirtschaft=bテキスト) への言及こそ、まさに中世後期のシュトラスブルクやケルンにおけるベギンの女性たちの「頻繁なる聖体拝領」の渇望への強い励ましとなっているのではなかろうか。

最後の段落でエックハルトは、土地を買ったという理由で盛大な晩餐への招待を断った者に関して、「このものはまだ〔この世の〕何か心配事に囚われている人たちで、この晩餐には決して与れない」と言う。さらに、「五対の牛を買いました」といった者に関しては、「この五対はとくに五感と係わりがあるように私には思われる」とした上で、「この意味は、五感に基づき生きるものは、真に、この食事は絶対食べられないということである」と説明する。そして三人目の者について、エックハルトは次のように語り、この説教を終わっている。「三人目のものは『私は妻をめとりましたので、伺えません』(aテキスト) といった。魂は、神に向けられたときに、完全に男である。魂が下を向いているときは、女といわれる。神自体を知り、神の家を求めるとき、魂は男である。…中略…魂が単純に仲介なしに神の内へ突き進むとき、魂は男である。しかし、魂が何か外に目を向けるならば、魂は女である。…中略…私たちが〔上にあげた〕三つのものを投げ捨て、このように男になれますよう、神よ、私たちをお助けください。アーメン」。エックハルトもまた時代の子であり、古代キリスト教以来の「女性嫌い」の伝統に何の疑問も持たず身を任せていることが、この箇所からも明らかである。しかしエックハルトとジェンダーをめぐる問題は別の機会に扱うことにして、ここでは、bテキストの最後の祈りの言葉と関係する事柄に注目したい。bテキストの最後の祈りは、「私たちがこの晩餐に行けるように。どうか神よ、私たちを助けてください。アーメン(Daz wir ze dirre wirtschaft komen. des helfe uns got! Amen.)」となっている。aテキストの最後の祈りは、「私たちが〔上にあげた〕三つのものを投げ捨て、このように男になれますよう、神よ、私たちをお助けください。アーメン (Daz wir dise drie abewerfen und alsus man werden, des helfe uns got. Amen.)」となっている。ここで、a、b両テキストに共通しているのは、聖餐における受け手の態度への強調である。すなわち聖体拝領を受けるにふさわしい者になりうるようにと祈っているのである。エックハルトにとって、頻繁なる聖体拝領はもとより望ましいことである。男性であろうが女性であろうが一般信徒に対して聖体拝領の回数を制限するなど、エックハルトには思いもよらなかったであろう。エックハルトにとって聖体拝領における問題は、そこにはなかった。聖体拝領における問題は、エックハルトにとって、ただ受ける者のイエス・キリストに対する集中度にのみあったのである。聖体拝領を受けるにふさわしく、イエス・キリストなる神に集中しているかどうか、神の招きに積極的に応答しているかどうかを、エックハルトは激しく問うのである。

結　び

以上見てきた如く、教導講話においても、説教第20番においても、聖体拝領についてのエックハルトのメッセージは同じ響きを持っていた。ただ、時代と聴衆が違った。教導講話は若き修道士を相手に語られ、説教第20番は14世紀初頭のライン川沿いの女性神秘主義華やかなりし状況下、修道女やベギンの女性達に対して語られたのである。同じことを語っても、聴衆の違いによってそのメッセージが惹起するものは大きく違ってくる。

講話や説教に響いていたエックハルトの「頻繁なる聖体拝領」についてのメッセージは、その師、アルベルトゥス・マグヌスとも、また先輩のトマス・アクィナスとも違っていた。その温度差は明らかである。それは、偏にエックハルトが聴衆を明確に意識した牧会者にして説教者だったからであろう。エックハルトは、会衆の日々の状況に寄り添い、配慮したのである。その状況とは、ここでわれわれは敢えてベギンの女性を念頭において言いたいのであるが、異端視されがちな日常における、彼女らの奉仕の日々である。当時の代表的といわれる女性神秘主義者の言葉にのみ焦点を当てるなら、ベギンの女性一般が働きもせず単なる恍惚境に遊んでいたように思えるが、エックハルトは己が説教の聴衆であるベギンの女性たちが、決してそのような者たちでないことを熟知していたに違いない。それは、これまでの研究でわれわれが触れてきたように、エックハルトがたとえば説教第86番において「Gewerbe (生業)」という言葉をベギンの女性の働きに対して用いていることからも窺える。ベギンの女性たちは「生業」に励みつつ、見捨てられつつあった病者を看護し、老いたる者や貧者を養ったのである。そのエネルギーが、聖体拝領であったと、われわれは考える。頻繁なる聖体拝領によってイエス・キリストと一体化したベギンの女性は、困難ではあるが、きわめて健全な生を活きたのである。ベギンの女性にとって、聖体拝領における「聖体 (ホスティア)」は、「食餌」であった。それを食べねば、彼女らは生きられなかったのである。

なお、本稿ではエックハルトの説教とベギンの聖体拝領の関係を詳らかにすることが目標であったが、それとは別に、副産物もあった。われわれは今回も今更の如く確認させられたのであるが、またこれは誰の説教に関しても言えることであろうが、特にエックハルトの説教は、エックハルト自身と彼を取り巻く状況との関係を踏まえて読まなければ、その力を感じ取ることはできない。ここで取り上げた説教第20番ａ、ｂは、われわれが示した如く、「聖体拝領」という鍵言葉によって、より現実感をもってわれわれに迫ってくるようになったのではなかろうか。

註

1 以下、聖書の翻訳は全て、『新共同訳聖書』によった。

2 翻訳は、小高毅編『原典　古代キリスト教思想史（Ⅰ初期キリスト教思想家）』教文舘、1999年刊、によった。

3 翻訳は註２と同じものを参照しつつ、省かれている文章を私訳した。『異端反駁』の当該個所全文の英訳は次の如し。(2. But vain in every respect are they who despise the entire dispensation of God, and disallow the salvation of the flesh, and treat with contempt its regeneration, maintaining that it is not capable of incorruption. But if this indeed do not attain salvation, then neither did the Lord redeem us with His blood, nor is the cup of the Eucharist the communion of His blood, nor the bread which we break the communion of His body. For blood can only come from veins and flesh, and whatsoever else makes up the substance of man, such as the Word of God was actually made. By His own blood he redeemed us, as also His apostle declares, "In whom we have redemption through His blood, even the remission of sins." And as we are His members, we are also nourished by means of the creation (and He Himself grants the creation to us, for He causes His sun to rise, and sends rain when He wills). He has acknowledged the cup (which is a part of the creation) as His own blood, from which He bedews our blood ; and the bread (also a part of the creation) He has established as His own body, from which He gives increase to our bodies.3. When, therefore, the mingled cup and the manufactured bread receives the Word of God, and the Eucharist of the blood and the body of Christ is made, from which things the substance of our flesh is increased and supported, how can they affirm that the flesh is incapable of receiving the gift of God, which is life eternal, which [flesh] is nourished from the body and blood of the Lord, and is a member of Him?)

4 H・デンツインガー編『カトリック教会文書資料集』浜寛五郎訳、エンデルレ書店刊、より引用

5 E.W.Mcdonnell, Beguines and Beghards, pp.305-315. C.W.Bynum, Jesus as Mother, p.256. M.Rubin, Corpus Christi, pp.169-176.

6 Rubin, Corpus Christi, p.17. 'Apparebat, inquam, ei luna in suo splendore, cum aliquantula tamen sui sphaerici corporis fractione ; quam cum multo tempore conspexisset, mirabatur multum, ignorans quid illa portenderet', vita Jnlianae……Tunc revelavit ei Christus ; in luna praesentem ecclesiam, in lunge autem fractione, defectum unius solennitatis in Ecclesia figurari, quam adhuc volebat in terris a suis fidelibus celebrari', (Vita JulianaⅡ, C.2,n.6, p.459).

7 The Catholic Encyclopedia の Feast of Corpus Christi の項による。

8 C.W.Bynum, Holy Feast and Holy Fast, London, 1987, p.58.(Albert the Great, for example, who supported the practice of daily communion, argued against it for women, fearing that frequent reception would trivialize response. =Albert the Great, Commetltarii inⅣSententiarum, dist.13,art.27,in Albert, Opera omnia, ed. August Borgnet, vol.29 (Paris : Ludovicus Visas, 1894), pp.378-80 ;

9 関根豊明訳『神学綱要』エンデルレ書店刊より引用

10 以下、エックハルトの著作の原文は Josef Quint,Meister Eckhart, die deutschen und lateinischen Werke,die deutschen Werke, Ⅰ－Ⅲ (1958-76), W.Kohlhammer Verlag.によった。なお、説教の訳文は『キリスト教神秘主義著作集６　エックハルトⅠ』の植田兼義訳により、一部私訳した。

11 マイスター・エックハルト著、川崎幸夫訳『エックハルト論述集』、創文社、297頁－298頁

12 同上

13 松山康国著、『無底と悪　序説』国際日本研究所刊、1972年、124頁―125頁。

14 C.W.Bynum, Holy Feast and Holy Fast, p.119.

（なお本稿は、1999年９月17日から18日にかけて函館で開催された「キリスト教史学会第50回大会」における研究発表の原稿に加筆したものである。）